

## 異文化コミュニケーションに関する一考察 —「恥」と「甘え」文化を中心に—

唐画女<sup>1)</sup>・大橋真<sup>2)</sup>

1) 青島理工大学外国語学院

2) 徳島大学教養教育院

〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1

E-mail:owhashi@gmail.com

### A Critical Overview for Problems of Cross-cultural Communication From the Standpoint of the “Haji” and “Amae” Culture

Huanu Tang<sup>1)</sup>, Makoto Ohashi<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Foreign Language Department, Qingdao University of Technology, <sup>2)</sup>Institute for Liberal and Sciences, Tokushima University

The problem of the cross-cultural communication should be clarified for resolving the problems for global society. One of the problems would be the understanding of the cultural difference of communication. In the present study, we analyzed the feature of daily communications of Japanese people from the stand point of the “Haji” and “Amae” culture. At present, the number of people in the traditional local society is decreasing in parallel with shrinking the space of “Seken” where “Haji” and “Amae” culture seems to be developed. In such a situation, most of university students have been grown up in the shrunk “Seken”. This likely lead to the development of “Sasshi” and “Enryo” communication culture. Taking the passive role in the daily communications in Japanese seems to be the major problems for difficulty of cross-cultural communications in English. Thus, the understanding of the difference of daily communication style in foreign culture would be essential for resolving the problems of the cross-cultural communication in local communities.

(Keywords: cross-cultural communications, globalization, local culture, local community, “Haji”, “Amae”)

#### 1. 緒言

地域の過疎化に伴い、伝統文化の形も変化しつつある。伝統的に日本は稲作文化圏に属し、それに必要な灌漑設備から苗代、田植え、収穫、脱穀などにいたる共同作業が必要であり、そのため家族を単位として横に結合する村落共同生活が営まれ、人々の協力、団結や調和の精神が尊重されてきた。このような閉鎖的な環境の中で、地域社

会全体として一定の秩序を保ちながら、調和を図るために世間<sup>1)</sup>という概念が活用されてきたと考えられる。地域社会の過疎化と人口の都市集中、さらにはグローバル化の進展により、世間の形が大きく変わってきた。日本と中国においては、世間と恥という考え方には、ある程度の共通性が見られる<sup>2)</sup>。しかし、グローバル時代を迎えて、コミュニケーションのあり方も変化を余儀なくさ

れている。このような時代には、異文化を背景に持つ人々と円滑にコミュニケーションが取れる能力や意欲が求められる。海外だけでなく、日本国内においても、文化的背景の異なる人々と良好なコミュニケーションを取り、協働していくことが不可欠な時代が来ている。しかし、日本においてはグローバル化の進展に伴う異文化コミュニケーションの重要性は一般的に認識されているにも関わらず、日本人のコミュニケーション能力育成に関しては課題が多いと思われる。

日本人の国際的なコミュニケーション力の低さは、英会話力の低さと同義で批判されることがある。この問題を考える時には、英会話力だけでなく、コミュニケーションという行為自体に対する文化的な背景の違いを理解する必要がある。外国語によるコミュニケーション能力は、外国語に関する知識の量や能力・練習量などにかかわると同時に、個人の性格や一般的な物事に関する知識や考え方などの要因が関与している。個人の性格に関しては、その生育過程において、個人の置かれた環境やそこに伝わる文化が自己の形成に多分に関与していると考えられる。このようにして、個人の性格も社会や文化の影響を受けており、社会や文化の産物として、地域社会に特有のコミュニケーション様式が、それぞれの地域社会に存在していると言えよう。

本論では、アンケート調査を通じて明らかとなった、日本人大学生のコミュニケーションにおける非言語メッセージ表現、行動様式及び発信力などの特性が、地域の文化的背景から、どのような影響を受けているのかを分析して、グローバル化する地域社会のモデルとして、異文化コミュニケーションの課題を探ることを試みた。特に世間との関連においての「恥」と「甘え」という観念<sup>3</sup>が、大学生の行動様式や判断力、そしてコミュニケーションの様式に、どのように影響を及ぼしているのかについて、これまでの先行研究を踏まえて、明らかにしていきたい。

「恥」と「甘え」という観念は、決して日本独特なものではなく、すべての人間に共通した性質であると指摘されている。しかしながら、日本人のコミュニケーションの特色として、「恥」と「甘え」の観念をもとにして考えていくと、その独自

性が育った日本的風土の特色が理解しやすくなると考えられる。このようにして、日本の地域社会の特色である世間における人間関係の要因として「恥」と「甘え」を、日本人的な行動様式やコミュニケーションと構造的に結び付けることで理解がさらに深まること期待できる。このような解明を進めていくことにより、大学の教育現場において、学生の異文化コミュニケーション能力を高めるための改善策を考えるきっかけになることも期待されよう。

## 2. 研究方法

### 2.1. アンケート調査

無記名マークシート 5 択式で、2017 年 5 月に徳島大学の在学一、二年生（総合科学部、教養教育院、医学部、理工学部、生物資源産業学部、薬学部）120 名を対象にアンケート調査を行い、有効回収票数は 101 票であった。

### 2.2. データ処理

Markscan（神奈川県教育委員会）を用いてマークシートのデータを読み取りとデータ集計を行った。クロス集計は、Excel2016（マイクロソフト）を用いて行った。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 大学生コミュニケーションにみられる特性

本論では、日本大学生コミュニケーションにおける文化的背景の影響を明らかにすることにより、異文化コミュニケーションに対する課題を考察することを目的としている。

アンケート調査によると、「外国語でコミュニケーションが苦手」と考えている大学生は 66% を占めている（図 1A）。言語的能力を習得した人間は、自由にコミュニケーションができるという想定が、従来の外国語教育の基盤の中に含まれていた。最近になって、言語能力はコミュニケーション能力の一部にすぎないということが、しだいに認識されるようになってきた。「日本人は外国語のコミュニケーションが苦手である」というような一般認識を変えるためには、人間のコミュニケーション活動について、内面及び外面の両面からコミュニケーションに関わる行動を分析し

て、さらに文化的背景がコミュニケーション活動にどのような影響を与えているのかについて明らかにしていく必要がある。

「自分は恥ずかしがり屋のほうである」と自認している学生は、全体の 58% を占めていることがわかった (図 1B)。この中で、「外国語でのコミュニケーションが苦手」とする学生の割合は 66% にも達していた (図 1C)。しかしながら、「自分は恥ずかしがり屋である」と思わない学生においても、63% の学生は外国語でのコミュニケーションが苦手という回答が 63% もあり、外国語でのコミュニケーションの苦手意識とという意識には、必ずしも明確な関連性は見られなかった。「自分は恥ずかしがり屋である」という意識は、個人的な性格によるものと、コミュニケーションの形態が地域文化的な影響を受けていることの 2 つの側面が関係していることが考えられる。恥ずかしがり屋というような個人的な性格についても、成長の過程において、地域社会の文化的影響を受けるために、コミュニケーションにおける声の問題は、地域社会の文化的影響を強く受けていることが考えられる。

### 3.2. 行動パターンとの関係

大学生の行動パターンについて、大学生は「いつも特定の友人と一緒に行動する」と回答した学生が圧倒的に多く、全体の 73% を占めている (図 2A)。この結果から、若者の友人づきあいは特定の仲間内に限られている傾向が強いことが判る。他より報告されている同様の趣旨の質問のアンケート調査の結果でも、年代別に比較をすると、若い世代に特にこのような傾向が強いことが示されている (羽淵 2002)。この結果は、人間関係の繋がりや範囲が以前に比べて狭くなってきており、各個人から見ると、世間として捉えることが出来る空間が限られてきたという見方が出来る。このような現象は、世間という概念に存在する人間の数が減少していることでもある。また、「友達と一緒に間違えば、恥ずかしくない」と回答した学生は、全体の 45% にも達していた (図 2B)。全体の仲間の周辺にいる人間関係が減少するのに伴って、限られた周辺の人からどう思われるのかを気にする傾向が強まることが考えられ

る。極端な場合には、仲間以外の人間関係がほとんど無くなり、「仲間以外はみな風景」<sup>4</sup> というような状態が起こってくる可能性がある。

「友達と一緒に間違えば、恥ずかしくない」という質問に対して、肯定的に捉えた学生は、「いつも特定の友人と一緒に行動する」グループの学生よりも、「いつも特定の友人と一緒に行動する」に否定的なグループのほうが少なかった (図 2C)。このように、特定の友人と行動する習慣のある学生は、集団で行動することで羞恥心を感じなくなる傾向があることがわかった。目立った行動をすることに対する意識 (図 3A) と発信力があるという意識 (図 3B) には、ある程度関係がある。

「目立った行動をすることに対して恥ずかしい」という意識のある群では、「発信力がある」と自認している学生は、14% に過ぎない (図 3C)。これに対して、「目立った行動をすることに対して恥ずかしい」ということに否定的な群では、「発信力がある」と自認している学生が、53% にも達している (図 3C)。

### 3.3. コミュニケーションにおける地域文化の影響

地域社会の文化的影響の中で、一般的に考えられてきたのは、「恥の文化」の影響である。大きな声を出したら恥ずかしいというような外面的な問題だけでなく、他の人と違うと恥ずかしいというような内面的なものも含まれる。このような地域文化の影響が、一般的に「日本人はシャイだから」というような固定観念を生み出してきたと考えられる。「恥の文化」以外に、日本人学生の「声が小さい」と自覚する学生が多い理由として、普段のコミュニケーションの形態が、大きな影響を及ぼしていることが想定される。

2 人または少人数のメンバーでの会話を中心の日常的コミュニケーションでは、それほど大きな声を必要としない。この日常的な会話において、「遠慮と察しのコミュニケーション」が中心となっていると、会話におけるコミュニケーションのスタイルが、自身の習慣として定着してしまうことが考えられる。

大人数を前にして、自分の意見を発信するためには、「遠慮と察しのコミュニケーション」型の

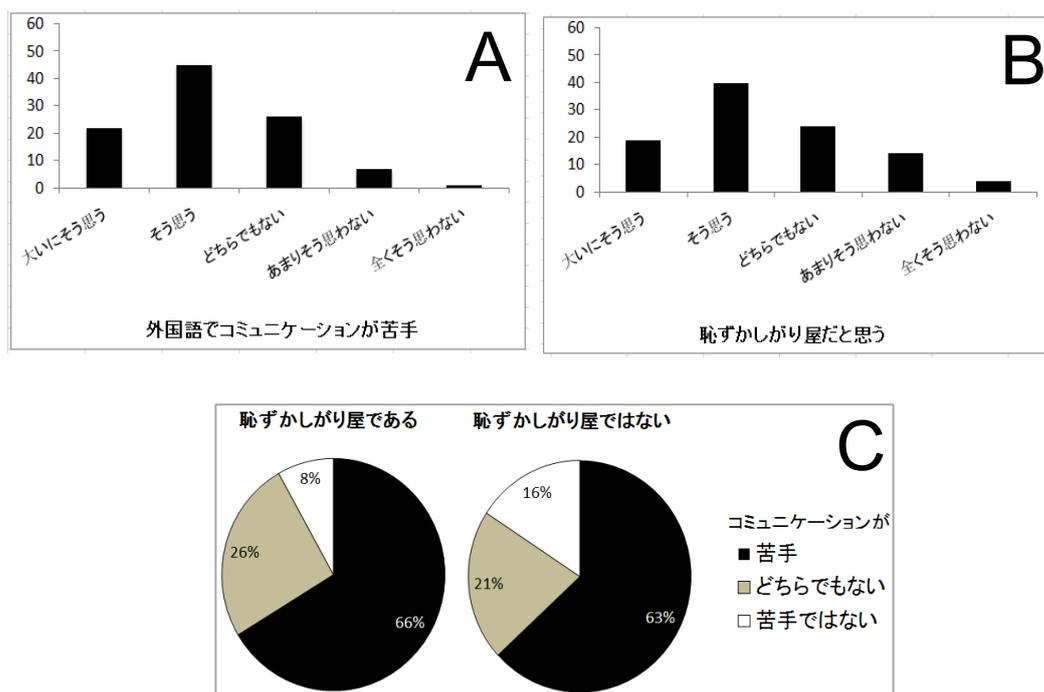


図1. 外国語コミュニケーションに対する苦手意識と恥ずかしがり屋という意識の関係

A. 「外国語でのコミュニケーションが苦手である」という意識, B. 「自分は恥ずかしがり屋である」という意識, C. 「自分は恥ずかしがり屋である」という意識と「外国語でのコミュニケーションが苦手である」という意識の関係性

会話<sup>5</sup>とは異なった, 発信したい内容を論理的にまとめる構成力が必要になる。そのために, 日常会話とは異なったコミュニケーション力が必要とされる。少人数での会話以外の経験が少ない学生にとっては, このような大人数を相手にする発言に対するハードルは高いと言えよう。

異文化コミュニケーションにおいても, 大人同様に, 「遠慮と察しのコミュニケーション」型の会話は通用しない場合が多い。日本に長期間の居住経験があり, 日本人のコミュニケーションの特徴に慣れている外国人を相手にして会話をする場合を除いて, 伝えようとする内容を, 普段の日常会話とは異なった文章構成にまとめなおしながら, 発言する必要がある。英語などの外国語での会話の場合も, 日本人の普段の日常会話で使われているコミュニケーションで省略されている用語を補いながら, 相手に伝わるような文章構成にする必要がある。外国語の日常会話の特徴についての知識があると, 日本語の日常会話の特徴を対比的に理解することが可能になるが, 英語に関

しても日常会話として使う機会がほとんどない日本人にとっては, 会話の特徴を経験的に学ぶ機会はほとんどないと言えよう。

### 3.4. 発信力に関する要因

2006年に経済産業省が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として社会人基礎力(3つの能力と12の要素)を提唱した。その中に「発信力」が含まれており, 自分の意見をわかりやすく伝えることであると解釈されている。社会人の基礎力中でも, 重要視されている項目であろう。このように, 発信力に影響を与える要因として「知識の量」, 「経験に基づくスキル」, 「情熱」などが考えられる。相手の心に響かせるという観点から考えると, これらの要因の中でとりわけ重要なのは「情熱」ではないかと思われる。知識が豊富であっても, 情熱の面から積極的な発信姿勢が整っていないと, 自信がなくて発信できない状態になる。情熱により, 「恥」の意識は変化しう

異文化コミュニケーションに関する一考察

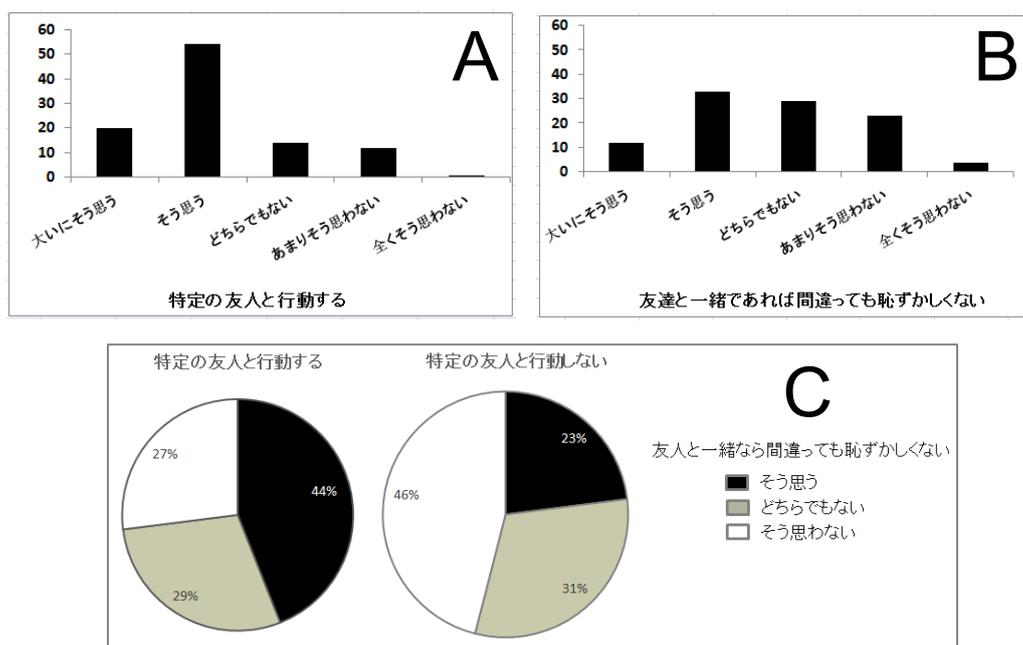


図2. コミュニケーションに関する行動

A. 「いつも特定の友人と行動する」という意識, B. 「友達と一緒にいれば間違えても恥ずかしくない」という意識, C. 「いつも特定の友人と行動する」という意識と「友達と一緒にいれば間違えても恥ずかしくない」という意識の関係性

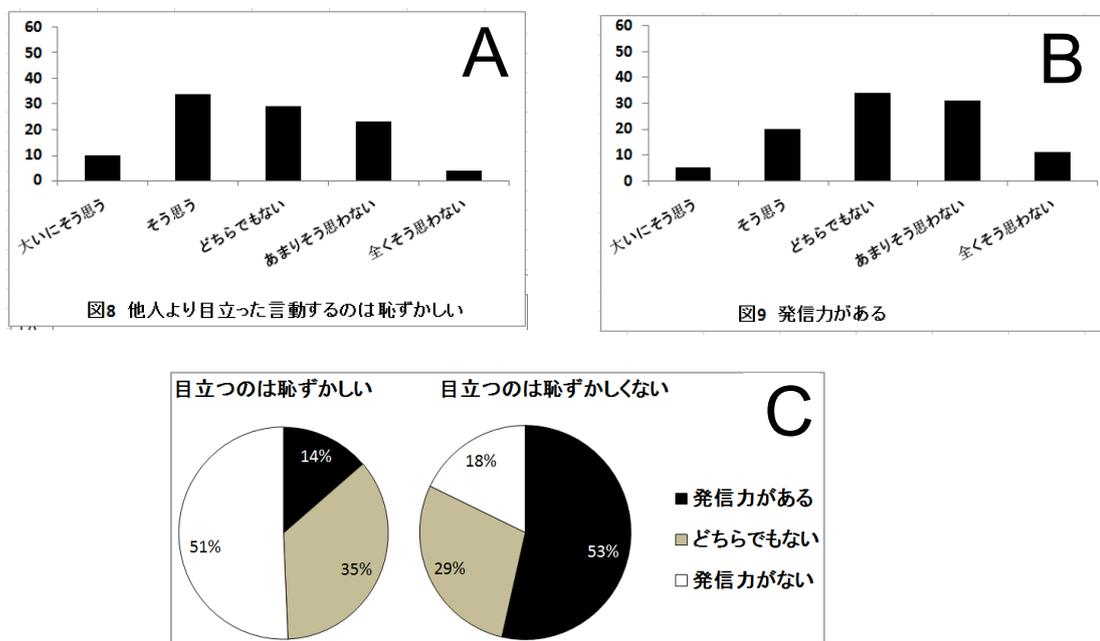


図3. 目立った行動をすることに対する意識と発信力との関係

A. 「他人より目立った行動をするのは恥ずかしい」という意識, B. 「自分は発信力がある」という意識, C. 「他人より目立った行動をするのは恥ずかしい」という意識と発信力との関係

ると考えられる。「他人より目立った言動をするのは恥ずかしい」という意識が、情熱により打ち消されることがあると思われる。

### 3.5. 「恥」「甘え」の日本文化論と現代社会のコミュニケーション

Benedict は、欧米人が自分自身の内面的な罪の意識に基づいて善行を行う「罪の文化」であるのに対して、日本人は、他者の目や他者の反応を意識して、外面的に他者から嘲笑されないように善行を行う「恥の文化」であると主張した<sup>6</sup>。これに対して、作田は、恥には他者からの否定的評価のみを対象とした「公恥」以外にも、理想的自己に照らした「私恥」という2つの側面があると指摘している<sup>7</sup>。これに関連して、有光は、「公恥」を他律的な恥とし、「私恥」を自律的な恥としている<sup>8</sup>。

甘えについては、精神分析学者の土居は「甘え」に該当する言葉が他言語に見つからないことや、「甘え」が日本人の心理と日本社会の構造を理解するための重要なキーワードであり、周りの人に好かれて依存できるようにしたいという、日本人特有の感情であることを指摘している<sup>9</sup>。

文化とコミュニケーションとの相互作用について、石井ら<sup>10</sup>は「コミュニケーション様式はわれわれが生活する文化によって規定されている」と指摘している。

「恥の文化」の観点から、現代の大学性のコミュニケーションのあり方を考えると、他人からどう思われるのかという外面的な強制力が常に働いているという面をうかがい知ることが出来る。典型的な例として、スマートフォンなどを常にチェックしている姿をいたるところで目にすることが多い。この場合の他人は、スマートフォンの交信相手であり、スマートフォンを操作している自身の周りの他人からはどう思われているのかについての関心はほとんどないようである。また、少人数の会話においても、会話の仲間同士においては、相手がどう思うかについて、気を使いながら話に熱中している光景が良く見られるが、その周りの人からどう思われるのかについては、関心を払っていないようである。このように、きわめて少人数の話し相手から、どう思われるのかにつ

いての判断を気にする会話のスタイルが、日常的に定着していると考えられる。このような少人数の相手から、どう思われるのかについて判断することで、自分が恥じないように常に気を使っているという面がある。

また、「甘えの文化」の観点から見ると、相手に好かれないという願望から、自身が内面的な強制力を働かせているという捉え方が出来る。このような思考の結果、周りの状況を気にすることなく、スマートフォンに熱中したり、少人数の会話が盛り上がりつつある場面を作っているという考え方も出来よう。また、話の仲間から反感をかわないように当たり障りのない曖昧な言葉を使ったりすることや、相手に同調するために自分の考えとは違う意見を言うような場合も、「甘えの文化」の要素が入っているように思われる。

### 3.6. 異文化コミュニケーションの課題

このように、日本の日常的なコミュニケーションにおいては、他者の判断を基準にして話が進行することが多いために、三人称が主語の文体が多く用いられる。また、主語は省略されることも多い。遠慮・察しのコミュニケーションでは、情報の主要な部分が省かれることがある。特に同じ文化を共有する仲間同士での会話では、その仲間での共有文化に関する事項が、会話の中で省略される。このような会話に慣れていると、何が省略されているのかについての自覚がなく、異文化コミュニケーションにおいても、異文化の相手にも共有されていると無意識のうちに判断しがちになる。このように、普段の日常会話において省略された部分に、地域文化の影響を受けた共有文化が存在する。異文化コミュニケーションにおいては、このように仲間同士の会話では必要がなく省略されている情報を予備知識のない相手にわかりやすい言葉で表現する必要が出てくる。

大人数を相手に話をする場合には、論理的な文章構成が必要になってくる。また、聴衆の中で既に共有されている文化的な背景については、必要に応じて省略することも可能である。そのためには、何が共有文化なのかについての推察が必要になる。

異文化コミュニケーションにおいては、論理的な文章構成と共に、共有文化の程度が不明であることも多い。このような場合には、相手の反応を見ながら、必要に応じて補足的な説明を付け加えることや、進行中の話題についての背景を説明することも必要になる。

外国語でのコミュニケーションは、このように日本語の日常的なコミュニケーションとは、異なった文章構成に組み替えた形で行う必要があり、そのためには、日本の日常的コミュニケーションの特色を理解することが重要である。

一般的に習慣化している行為について、客観的な視点から見直すことは、容易ではない。自身の習慣化している行動を、別の視点から考え直すためには、異文化交流が、そのきっかけになり得る。しかしながら、異文化交流において、十分な意思疎通を図るために、一定レベルの異文化コミュニケーション能力が必要になる。

このような問題を解消する手段として、日常的なコミュニケーションにおける地域文化の影響に関する研究をさらに発展させて、地域社会におけるグローバル化の課題として、その対策の中に組み入れる必要があると考えられる。これから学ぼうとする外国語が使われている地域社会における日常的なコミュニケーションが、その地域社会の伝統文化の影響をどのように受けているのかについて、自身の日常的コミュニケーションの場合と比較しながら、系統的に学ぶことにより、自身の習慣を客体化することが容易になり得る。異文化コミュニケーションに関する教育プログラム開発には、コミュニケーションに関係する比較地域文化学の視点を組み入れることも、今後は検討していく必要があると思われる。

## 謝辞

この研究に協力いただいた徳島大学の学生諸君と、データ集計に協力いただいた岡村栄作君に感謝する。

## 参考文献

1. 阿部 謹也, 「世間」とは何か, 講談社, 1985
2. 劉 潔, 大橋 眞, 「世間」に関する一考察: 日本と中国における「世間」と「世間」から見る恥の文化を中心に, 言語文化研究, 17, 83-102, 2009
3. 羽渕 一代, 変容するメディア環境と恥, 教育と医学 50, 704-710, 2002
4. 宮台真司, 「郊外化」と「近代の成熟」井上俊他編 岩波講座 現代社会学(10) セクシュアリティの社会学, 203-222, 1996
5. Ishii S. Enryo-sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations, Cross currents Journal of Language teaching and cross-cultural communication.11, 49-58, 1984
6. Benedict Ruth, 1946, The Chrysanthemum and the Sword, Houghton Mifflin. 長谷川松治訳 菊と刀, 社会思想社. 1967
7. 作田 啓一, 恥の文化再考, 筑摩書房, 1967
8. 有光 興記, 恥と罪悪感, 教育と医学. 50, 732-739, 2002
9. 土居 健郎, 「甘え」の構造, 弘文堂. 1971
10. 石井 敏, 岡部 朗一, 久米 昭元, 異文化コミュニケーション 新・国際人への条件 改訂版, 81-100, 有斐閣, 1996